

『宿曜経』の大蔵経本と和本の比較

矢野道雄

『宿曜経』の大蔵経本と和本の比較^①

矢野道雄

はじめに

一 インドの占星術の基本

『源氏物語』の「桐壺」に

宿曜^{すくぎょう}のかしこき道の人に勸^{かむか}がへさせたまふにも、同じさまに申せば、源氏になしたてまつるべく思しおきてたり

インドの占星術は大きく二つに分類することができる。一つは月とその背景にあるナクシャトラ（星宿）との関係によって占うものであり、わたしはこれを「太陰占星術（lunar astrology）」と呼んでいる。もう一つは地中海世界から伝えられたもので、惑星と十二宮、十二位との位置関係によって占うものであり、「ホロスコープ占星術」と呼ぶことができるだろう。両者の概略を示すと次のようになる。

(1)

とある。帝は若い王子の将来を心配して宿曜師に相談したのである。このように、宿曜道は平安時代の貴族の間で流行していた。その原典は弘法大師空海が大同元年（八〇六）に請求した『宿曜経』である。日本では空海請求本は忠実に書写されてきたが、大陸では「中国化」が進み、その結果二つの系統には大きな相違が見られるようになった。本稿ではまず『宿曜経』の背景となったインドの占星術の基礎を紹介し、大陸本と和本の相違を明らかにし、日本における一切経の伝統の重要性を示す一例としたい。

(一) 太陰占星術

「ナクシャトラ」とは月の通り道の近くにある二十八または二十七の恒星のグループを月の宿と見立てたものであり、太陰占星術の基本である。ナクシャトラは、紀元前八〇〇年頃の『タイツティリーヤ・サンヒター』や、『アタルヴァ・ヴェーダ』など古い文献に見られ、最初から占いの要素をも

っていた。これらの文献や原始仏典ではナクシャトラは二八を数えることが多いが、時代が下がるとほとんどの文献で二十七宿の体系を用いる。

(二) 仏典と太陰占星術

仏教文学の「ジャータカ」に属する「遠い因縁話」、「遠くない因縁話」、「星宿前世物語」などには占星術の要素が見られるが、占星術を肯定しているものばかりではなく、むしろ占星術を信じている人を批判しているものもある。「アヴァダーナ」文献に属する『シャールドゥーラカルナ・アヴァダーナ』(Sardūlakarṇāvadāna)では仏陀の前世物語のなかで、マータンガ族の王トリシャンクが占星術の知識を披露する。現行のサンスクリットテキストはインドのシャンティニケータンから出版されたものであり、比較的後の時代の写本に基づいているが、ペテルブルグの写本図書館には五世紀頃の中央アジア写本の断片があり、そこには古い要素が垣間見える。この写本は最近になって、創価大学国際仏教学研究所の web page で公開された。

(1) 『摩登伽経』。三世紀末の竺律炎・支謙訳。

(2) 『舎頭諫太子二十八宿経』。四世紀初め竺法護訳。

これらは密教とは直接関係はないが、占星術の要素が中心を占めるので、大正大蔵経では『密教部』に収録されている。

(三) 二十八宿から二十七宿へ

多くの古い文献で見られるのは二十八宿体系であるが、「ヴェーダ補助学の暦法」(Vedāṅgajyotiṣa)は二十七宿を用いる。この文献の年代は明らかではないが、等間隔座標としての二十七宿が使用されていることを根拠として、比較的后世のものであると言うことができるかもしれない。月の対恒星回転周期(恒星月)はおよそ二七・三日であるから、端数を切り上げると二八に、切り捨てると二七になる。中国では常に不等間隔の二十八宿であり、四方に七宿ずつ配置する。いっぽうの二十七宿はきわめてインド的である。なぜならインドでは古くから三の倍数が好まれていたからである。また等間隔座標という点では十二宮と似ており、西方からの影響があったかもしれない。二十七宿の場合にはアビジト (Abhiṣit. 20) が落とされるが、これは中国では「牛宿」に充てられるものである。

表 1

	サンスクリット	摩	舎
1	クリッティカー	昴	名育首
2	ローヒニー	畢	長鹿生
3	ムリガシラス	觜	増財
4	アールドラー	參	熾盛
5	プナルヴァス	井	熾不
6	プシュヤ	鬼	土觀
7	アーシュレーシャ	柳	星北
8	マガー	星	翼德
9	プールヴァ・パールグニー	張	軫象
10	ウッタラ・パールグニー	翼	角彩
11	ハスタ	軫	善元
12	チトラ	角	善格
13	スヴァーティー	亢	善悦
14	ヴィシャーカー	氏	善尊
15	アヌラダー	房	心長
16	ジェーシュター	尾	元魚
17	ムーラ	箕	前魚
18	プールヴァ・アーシャーダー	斗	北魚
19	ウッタラ・アーシャダー	牛	無容
20	アビジット	女	耳聽
21	シュラヴァナ	虚	貧財
22	ダニシュター	危	百毒
23	シャタピシャジュ	室	前賢
24	プールヴァ・バードラパダー	壁	北賢
25	ウッタラ・バードラパダー	奎	流灌
26	レーヴァティー	婁	馬師
27	アシュヴィニー	胃	息
28	バラニー		

『摩』は『摩登伽経』、『舎』は『舎頭諫太子二十八宿経』

二十八のナクシャトラの名称とその漢訳は表1に示した通りである。『摩
登伽經』は中国天文学の二十八宿名をその訳語として用いているが、『舎頭
諫太子二十八宿經』には意識の試みが見られる^②。古い文献では「クリッテイ
カー」から数えるので、それに従って便宜的に番号を付した。紀元五〇〇年
頃に確立した古典天文学の座標では「アシユヴィニー」(27)の初点を春分
点とする。このような出発点の違いは現代の天文学で「歳差」と呼ばれる現
象をおおまかに反映していると言える。等間隔の場合二宿の間には二六度四
〇分の差があるから、年数に換算するとおよそ一八〇〇年になる。これをそ
のままヴェーダ時代と古典天文学の時代の年数差とするのは早計であろうが、
おおよその時代背景の差を示しているといえるだろう。

また、ヴェーダ補助学では等間隔の二十七宿が採用され、ダニシュター
(22)を冬至点と見なしている。すなわち、春分点が「バラニー」(28)の一
〇度と見なされていることになるが、これも注意すべきであろう。このよう
な新しい座標が西方の十二宮の影響なくして成立したかどうか、今後検討す
る必要がある。西方の影響があったとすると、『ヴェーダ補助学の暦法』の
テキストの成立年代は再考する必要があるだろう。

二 ホロスコープ占星術

紀元後三・四世紀ごろ、ギリシアのホロスコープ占星術がインドに伝えら
れた。それをはつきりと示すのが、サンスクリットの韻文で書かれた『ヤヴ
アナ・ジャータカ』である。ピングリー教授が校定し英訳して出版して以来、
地中海とインドの文化の関係を示す重要な資料とみなされてきたが、その韻

文版の成立年代を西暦二六九年とするピングリーの説は、最近私がネパール
で発見した写本に基づいたマク(BEJMA)^④氏の研究によって、根拠のない
ものであることが明らかになった。いまのところ「紀元後三・四世紀ごろ」
とするのが妥当であろう。この書物にはヘレニズム起源の占星術が詳細に描
かれているが、一方当時のインドの文化も十分取り入れられており、その原
型の成立はヘレニズム世界であっても、現在の韻文版は西インドで生まれた
ものであるということが出来るだろう。

(一) ラーマのホロスコープ

古い時代のインドのホロスコープの実例は現存しないが、いわば「架空の
ホロスコープ」は存在する。その代表は『ラーマヤナ』の冒頭に見られる
ラーマ生誕のときの天体の配置である。図として残っているわけではないが、
西洋起源のホロスコープが背景にあることは明らかである。ここには次のよ
うに述べられている。

それから一二か月目のチャイトラ月の第九日に、「月の位置する」星
宿がプナルヴァスであり、また五つの惑星が「いずれも」自分の高揚位
に位置し、「東の地平線上に」懸かったかたに宮にある木星が月とともに
上昇しつつある時、ヴィシユヌの化身としてすべての世間の人々に尊敬
され、すべての吉相をそなえたラーマを、カオサルヤー妃が生んだ。

(岩本裕訳、平凡社東洋文庫、若干修正^⑤)

この岩本訳はボンベイ版 (Bombay edition of the *Rāmāyana*) を使用しており、「少年の巻」 (*Bālakāṇḍa*) の 18.8-10 に相当するが、現在研究者によって最もよく用いられているプーナ版には見られない。「高揚位」は西洋占星術の概念である。このような占星術的内容はヘレニズム占星術の影響なくしては考えられないことは明らかなので、プーナ版の編者は後世の挿入と見なしたのかもしれない。しかし、この部分が、最初からあったとすると、『ラーマヤナ』の年代は通常認められているよりもかなり遅れることになるだろう。

なお中世ペルシア語で書かれたゾロアスター教の宇宙論書『ブンダヒシュン』 (*Bundahishn*) に「世界のホロスコープ」と呼ばれるものが見られる⁶。世界が誕生したときの天体の配置を示して世界の運命を占うという趣旨のものである。興味深いことにそこに描かれた天体の配置はラーマのホロスコープとほぼ同じである。『ラーマヤナ』のモチーフと『ブンダヒシュン』のそれがどのような関係にあるのか、大変興味深い問題である。

(二) 曜日の概念の成立

『宿曜経』の「宿」は既に述べたようにインド要素であるが、「曜」のほうはヘレニズム占星術に由来する。古代インドでは不思議なことに惑星は余り大きな関心をもたれていなかった。ヴェーダ文献ではつきりと惑星と見なすことのできる記事はない。あってもせいぜい金星と木星だけである。ところが『ヤヴァナ・ジャータカ』によって伝えられたヘレニズムの占星術は惑星が大きな役割を果たしていた。インド人にとって斬新なこの占いの手法は急

速にインドに浸透していった。

古代の西洋で「プラネット」と呼ばれるのは太陽と月と五惑星である。この七惑星が「曜日」の基礎にある。ギリシア天文学では地球を中心とする同心球宇宙論が確立していたが、プラネットの配列順序が確立するには紆余曲折があつた。最終的に天文学者たちが認めたのは、天球の外側から並べて、

土星、木星、火星、太陽、金星、水星、月

の順序であつた。いっぽうエジプトでは一日を二四時間とし、それぞれに惑星神を右の同心球の順序で当てはめることになつた。ある日の一時間目の惑星が土星であるとすると、八時間目、一五時間目、二二時間目も土星が支配し、二四時間目は火星になってその日は終わる。次の日の一時間目は太陽が支配することになる。つまり土星から数えて三番目である。このように同心球の順序に並べられた惑星を三つごとにとると土、日、月、火、水、木、金の順序で毎日の一時間目を支配することになる。一時間目を支配する惑星はその日全体の支配者でもある。このようにして、現在われわれが用いている曜日の順序が成立したのである。その成立は紀元前後のころであろうといわれるが、『ヤヴァナ・ジャータカ』によっていちはやくインドに伝えられた。インドでは曜日の神は「グラハ」とよばれる。「とらえるもの」という意味である。人間にとりついて善悪の影響を与える神として畏怖の対象になつたのである。曜日の概念はインドの占星術ではきわめて重要な要素になり、天文学でも惑星を列挙するときは必ずといっていいほど、「太陽、月、火星、水星、木星、金星、土星」の順序になる。これが『宿曜経』のもうひとつの重要な概念である「曜」の意味である。

(三) インド占星術の完成

『ヤヴァナ・ジャータカ』によって導入されたホロスコープ占星術を完成させたのは六世紀中葉にアヴァンティ地方の宮廷占星術師として活躍したヴァラーハミヒラ (Varāhamihira) である。祖先は西インドに移住したペルシアのゾロアスター教徒であった。かれは占星術の知識によってみずからの地位を「バラモン」と呼ばれるまで向上させた。多作であるが、代表作として次の三点をあげることができる。

(1) 『占術大集成』(Bṛhatsamhitā)。王宮占星術師のマニュアルである。古来のほとんどの占いを集めた百科全書的な書。矢野・杉田訳『占術大集成』(平凡社東洋文庫) 参照。

(2) 『ブリハッ・ジャータカ』(Bṛhajātakā)。ホロスコープ占星術書。惑星、十二宮、十二位を中心としたギリシア系の誕生占いが中心であるが、インド古来のナクシャトラも取り入れる。

(3) 『五天文学派綱要』(Pañcaśākhāntikā)。当時知られていた五つの天文学書をまとめたもの。天文学書の精度の違いについても言及している。そのなかで彼が最も精度が高いとみなしている『スールヤ・シッダーンタ』は後に改編されてインドで最もよく流布した天文学書になる。

二二(一) 『宿曜経』の成立

『宿曜経』は文殊師利菩薩と諸々の仙人に帰されているが、実際の著者は

元バラモンであり中国に帰化したアモーガヴァジュラ (Amoghavajra、七〇四―七七四年) である。中国名は「不空金剛」(または不空) であり「真言八祖」の第六祖として知られる。七四一―七四六年に南インドとスリランカを旅行して多くの密教経典を収集した。また当時インドで当流行していた占星術をまとめて『宿曜経』とした。

(二) 『宿曜経』上下巻の関係

乾元二年(七五九)、不空が口述した『宿曜経』を弟子の史瑤が漢文で書きとめたものが「初訳」である。そのタイトルは『文殊師利菩薩及諸仙所説吉凶時日善惡宿曜経』であった。音訳語が多く、インドの香りが豊かであるが、中国人の読者向けではなかった。そこで不空は廣徳二年(七六四)に天文学者楊景風に「改訳」を命じた。改訳のタイトルは『文殊師利菩薩所説宿曜経』であり、初訳の「及諸仙」と「吉凶時日善惡」が抜けている。楊景風は改訳の最後に「算曜直章」を挿入した。後になって改訳と「算曜直章」が『宿曜経上巻』、初訳が『宿曜経下巻』とみなされる。楊景風の改訳は『宿曜経』の「中国化」の最初の試みであった。

『宿曜経』はインドの占いの基本である「二十七宿」と「七曜」に関する基本的な知識を与えるが、ヴァラーハミヒラの『ブリハッ・ジャータカ』に見られるような高度で煩瑣な占星術的内容は一切省略されている。またインドの暦と占いで重要な時間単位である「ティティ」(太陰日)と普通の日(暦日)との区別は明瞭でない。したがって「ティティ」の半分の単位である「カラナ」が理解されていない。この書物だけで本格的な占いをすること

はほぼ不可能であった。それゆえ後になって、より専門的な書物が請来されることになったのである。

四 大陸本と和本のちがい

『宿曜経』は成立後まもなく日本に請来された。不空の弟子の恵果から密教を伝授された弘法大師空海が大同元年（八〇六）にその他の經典とともに持ち帰ったのである。『宿曜経』はその後大陸では「中国化」によって大きな変化を被るが、空海請来本はほぼ原型の姿をとどめたままであった。和本と大陸本の大きな違いは次の三点にまとめることができる。

1 「算曜直章」の有無

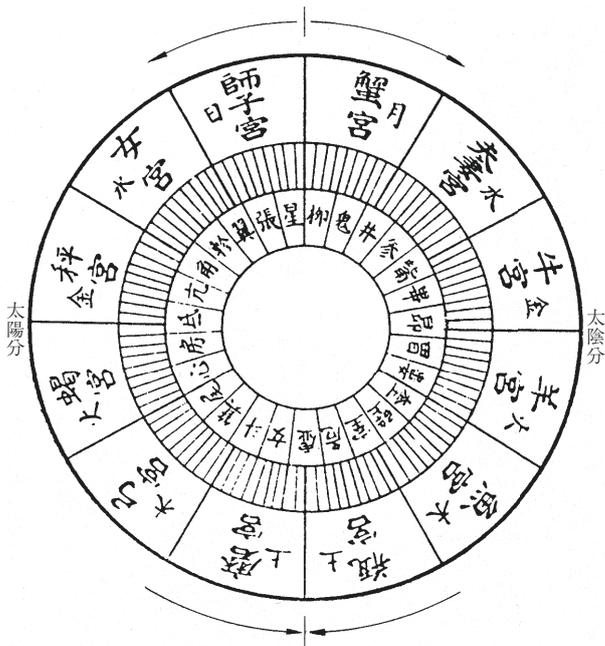
楊景風は改訳にあたって、巻末に「算曜直章」を挿入した。『宿曜経』と異なるが曜日を知ることができなければこの書物の価値が下がることを恐れたのである。「算曜直章」はほとんどがインド式天文計算書『九執曆』からの引用であり、楊景風は『九執曆』に対して註釈を施している。そこに見られるのは、積日を求めて七で割った余りによって曜日を求めるというインドの伝統的なアルゴリズムそのものである。この「算曜直章」は大陸本では早い時期に削除された。おそらくこのアルゴリズムは暦元が近い過去のとときには有効であるが、暦元を遙か太古に遡る場合には定数の精度が良くないので正確な結果を得られないということが中国人学者によって看破されたからであろう。しかし和本では「算曜直章」は削除されることなく忠実に書写され続けた。

2 二十七宿と二十八宿

『宿曜経』は本来二十七宿体系に基づいていたはずであり、そのことは和本を見れば明らかである。したがって占いのほとんどの項目は「アビジト」（牛宿）を除く二十七宿が前提となっていた。ところが大陸本ではすべて牛宿を含む二十八宿体系へと変えられている。そうしなければ中国人読者には受け入れられなかったからであろう。

毎日の宿と日の対応は現在のインドの伝統暦でもきわめて重要な要素であるが、これをあらかじめ表の形で示したものが『宿曜経』の「月宿傍通曆」である。この表ではひと月は大小の区別なく常に三〇日とされ、月は一日に一宿ずつ動くことと見なされている。この「日」はインドの「ティティ」に相当するものであり、一朔望月を三〇等分した人為的な単位（厳密には太陽と月の離角が二度になる時間単位）である。各月の満月日（十五日）の宿は、満月が位置するナクシャトラであり、そこから前後に一日に一宿ずつずらしていく。三〇日（厳密には三〇ティティ）に二十七宿を割り当てるのであるから、各月の最初と最後の三日は同じ宿が重複することになる。ただしこれは和本の場合である。大陸本はすべて二十八宿体系を用い、「正月一日」を「虚宿」とする。それから毎日一宿ずつ進行していくので、実際の月の運動とは無関係で、単純に二八日の周期で巡るだけである。このように「月宿傍通曆」は和本と大陸本とは全く異なったものになっている。

藤原道長が『御堂関白記』を書き付けるときに用いた「具注曆」の日付のところには「宿」と「曜」があらかじめ朱で書き込まれているが、その「宿」は『宿曜経』の和本の「月宿傍通曆」と全く同じである。つまり「牛」宿を欠く二十七宿である。したがって日付と宿との関係は陰陽道のものでは



(森田龍遷著『密教占星法』高野山大学出版部、一九四一年)

なく、インド占星術そのものであるということがわかる。道長の行動自体その日の「宿」と「曜」の組み合わせに左右されていたと思われるが、これについてはさらに検討する必要があるだろう。宿と曜の組み合わせによる「金剛峰日」など三種類の日については『密教占星術』一一四—一一五頁参照。

3 冒頭部の重字脱落

『宿曜経』の冒頭に、十二宮と二十七宿の関係を示す重要な一節がある。これには十二宮に七惑星を配当する西洋占星術の基本が背景にある。まず「獅子宮」からの六宮を順に太陽が支配するとみなして「太陽分」と呼ぶ。いっぽう月は「蟹宮」から逆向きに「太陰分」の六宮を支配する。さらに太

陽と月が支配する六宮のうち「獅子宮」と「蟹宮」以外の五宮を支配するのは、先に述べた同心球地球の順序に並べられた五惑星(水、金、火、木、土)である。これをわかりやすく図示すると上の図の外側の円のようになる。

これはきわめて重要な概念なので、『宿曜経』はおなじ理論を二十七宿にも当てはめたのである。十二宮と二十七宿の対応関係は、「羊宮」の初点を「婁宿」の初点とする。インド占星術では「メーシヤ(おひつじ)」の初点はアシユヴェニーの初点」云々という宮と宿の関係を教える韻文がヴァラーハミヒラの『占術大成』以来、人口に膾炙している。その対応関係は図の内側に示されている。それぞれの宿は「四足」からなっている(「足」はサンスクリットの pada の翻訳で、「四分の一」を意味する)。ここで太陽分の最初の「獅子宮」は「星宿四足」「張四足」「翼宿一足」からなっている。同様に太陰分の最初の「蟹宮」は「柳宿四足」「鬼四足」「井宿一足」からなっている。これを『宿曜経』の和本では次のように述べている。

日理陽位、従星宿順行。取張翼軫角亢氏房心尾箕斗女等一十三宿、迄至于虚宿之半。恰當子地之中分爲六宮也。月理陰位、従柳宿逆行。取鬼井參觜畢昴胃婁奎壁室危等一十三宿、迄至虚宿之半、恰當子地之中分爲六宮也

つまり太陽は「星」宿から順に「女」宿まで十三宿と「虚」宿の半分を、月は「柳」宿から逆順に「危」宿まで十三宿と「虚」宿の半分を支配するということである。ところが大陸本では右の太字部分が脱落している。最初に「一十三宿」まで書写したあと、次の「一十三宿」までとばしてしまったの

である。写本筆写のときにしばしば起る重字脱落 (Haplology) の典型的な例である。この誤りはかなり古い段階で起こったと思われる、すべての大陸本に見られる。いっぽう空海請来本の系統に属する写本にはこのような脱落はない。空海は脱落が起こる前の写本を請来することができたのである。筆者が和本の重要性を知ったのはこの重大な脱落が大正大蔵經の『宿曜經』に見られることに気づいたからである。大陸でこの脱落を補う試みがなされなかったのは、この經典から真面目に学ぼうとする読者がいなかったためではなからうか。わたしは日本に伝えられる『宿曜經』の写本の善し悪しを判断する基準として、まずこの冒頭部分をチェックすることになっている。なお京都で村上勘兵衛が延宝九年(一六八二)出版した版本は大陸系の『宿曜經』に基づいているが、京都大学所属の村上本には熱心な読者の書き込みがあり、冒頭部分のマージンには右のような脱落があること注記されている。

五 日本にある『宿曜經』の古写本

現在まで林隆夫氏と筆者が調査することのできた『宿曜經』の写本は古いものから順に次の六点である。

(1) 京都妙蓮院松尾社写本(下巻のみ)。一一一五―一一三八年。二〇一五年二月、林隆夫氏撮影。

(2・1) 高野山無量寿院写本一(上下一巻本)。一一六〇年。高野山靈宝館蔵。二〇一三年、カラー写真入手。

(2・2) 高野山無量寿院写本二(上下別巻本)(2・1)と同じくらい古い。二〇一三年、カラー写真入手。

(3) 一一七四―一一七九年 名古屋の七寺写本。七寺の住職蟹江良輝さんのご好意で画像入手。上巻は大阪市立博物館に寄託。カラー写真入手。

(4) 新宮寺写本。一二三三―一二五九年。林氏調査、撮影。

(5) 高野山持妙院写本。一二三六年。一九八五年に高野山大学図書館から白黒写真のコピー入手。

(6) 同志社理工学研究蔵。一二三二年。同研究所の林隆夫教授がオークションで入手。同志社大学の web archives で公開されている。

これらの他一九八五年に東寺の写本を実見したが、古いのは上巻のみであった。ただし年代不明。冒頭部と奥書部分の写真のみ入手した。

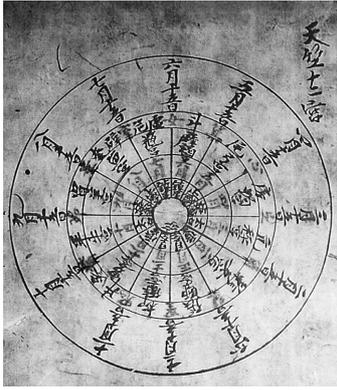
六 覚勝本について

空海が請来した『宿曜經』の古写本を比較検討し、できるだけ原型に近い形で信頼できるテキストを確立しようとした結果を見事に反映したのが「覚勝本」である。校訂者の覚勝は現在の奈良県五條市にある真言宗の寺院柴水山吉祥寺の学僧であった。序文によると享保二十一年(一七三六)に校訂をすませている(出版は「高野山経師八左衛門」による)。覚勝は校訂にあたって五種類の写本と、明本と高麗本を用いている。写本の間に異読が少なくないこと、大陸本には和本との大きな違いが見られること、原典が正確に伝えられていないことなどを嘆いている。しかし覚勝は高野山の無量寿院の経蔵で閲覧することのできた写本は五〇〇年ほど以前のものであると推定し、これが最も古く、弘法大師が請来した写本をよく伝えていると知って喜び、これを底本にして校訂作業を行ったとしている。覚勝本は頭注に異読をあげてい

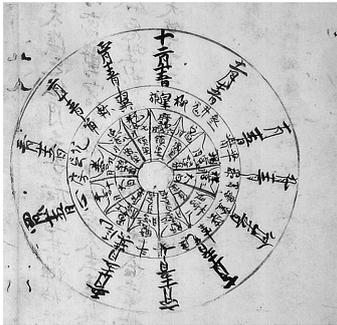
る。例えば「州一本作洲」は「州」には「洲」という異読があるということである。ただ残念ながら「一本」というだけでそれがどの写本であるかを明記していない。また「五明高作三」は和本では「五」とあるところを「明高」（大藏経本）では「三」と読んでいるということである。このように「覚勝本」は無量寿院写本のきわめてすぐれた「再現編集本」(diplomatic edition)であると言いうことができるだろう。

七 図版について

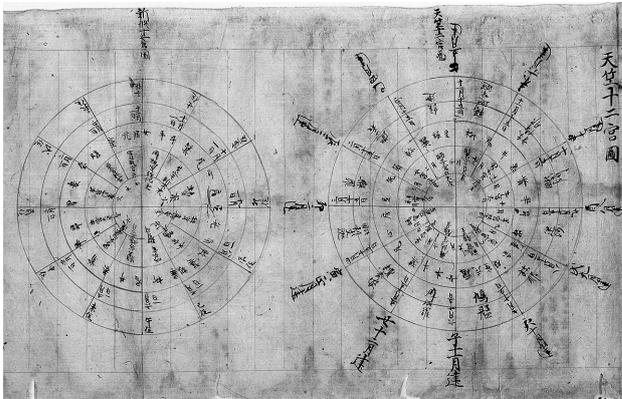
筆者が調査することのできた『宿曜経』はいずれも図を含んでいる。上下巻がそろっているものうち最も古い无量寿院写本1は上巻五葉に「天竺十二宮圖」がある。七寺写本と新宮寺写本も同じタイトルで三つの図を載せている。「二十七宿十二宮圖」は持明院写本と同志社写本には見られない。いっぽう大藏経本には「天竺十二宮圖」も「新修十二宮圖」もなく、図としてあ



无量寿院写本 1



无量寿院写本 2



七寺写本の「天竺十二宮圖」(右)と「新修十二宮圖」(左)

るのは「二十七宿十二宮圖」だけである。

実際の図を見ると、図の配置にはかなりのヴァリエーションがあることがわかる。たとえば同じ「天竺十二宮圖」の无量寿院写本でも写本1のほうは「六月十五日」が上(天にあたる場所)にあるのに対して、写本2のほうは「十二月十五日」が天に配置されている。「新修十二宮圖」のほうも両者は天地が逆になっている(2のほうにはラベルがない)。これらを七寺写本と比べると、七寺写本の両図は無量寿院写本2のほうと同じであることがわかる。ただし奇妙なことに、七寺写本では「天竺十二宮圖」と「新修十二宮圖」の他、「二十七宿十二宮圖」でも「斗」宿と「女」宿の間に「牛」が見られる。本来古い和本には「牛」はなかったはずである。最古の妙蓮院松写本でも二十七宿であり、わざわざ「唐国廿八宿、西国降牛宿」と付記しているほどである。したがってどの段階で七寺写本に「牛」がまぎれ込んだのが気になるところである。

「二十七宿十二宮圖」の場合は写本による相違が大きく、同じ天の位置であっても、「十五日」は無量寿院写本1と同志社写本では「十二月」、七寺写本では「正月」、新宮寺写本では「十月」、大正大藏経では「二月」と「九月」の二

種類となっている。興味深いことに、大正大蔵経本でも、二種類の「二十七宿十二宮圖」の両者ともに、そのラベルの通り、牛宿を除く二十七宿システムになっている。ちなみに覚勝本は三つの図を無量寿院写本1と同じように配置している。わたしもこれらの図がオリジナルであったらうと推測している。このような図の違いも写本の系統を考える際の手がかりになると思われるので、付表とした。また写本によっては図のところだけを空欄にしてあるものもある。これは本文テキストと図とが必ずしも同時に筆写されるものではないことを意味している。

むすび

空海が大陸から請求した『宿曜経』がどのようなものであったかは今となってはわからないが、請求本に基づく「和本」が大陸で伝えられた大蔵経本よりもはるかに原型に近いことは明らかである。おそらく中央アジアに伝えられているインド起源の文献の写本も、「中国化」という変化を被っていないかぎり、原型をよく保存しているのではないかと思われる。文化の周辺世界では古い要素が保持されるという民俗学や言語学の理論は文献学にも当てはまることが多いのである。

註

(1) 本稿の一部は同志社大学理工学研究所の林隆夫教授との共同研究に負っている。『同志社大学理工学研究報告』53(4)、二〇一三年参照。また拙著『密教占星術』増補改訂版(東洋書院、二〇一三年)ではこの論文と、林氏の論考を付録

とした。

- (2) 矢野道雄『星占いの文化交流史』(勁草書房、二〇〇四年)一一八―一二〇頁および『密教占星術』増補改訂版、六〇―六一頁(補足)参照。
- (3) David Pingree, *The Yavanajātaka of Sphujidhvaia*, Cambridge MA, 1978.
- (4) Bill Mak, 'The Last Chapter of Sphujidhvaia's *Yavanajātaka* critically edited with notes', *SIAMVS* Vol. 14 (2013), pp. 59-148.
- (5) 矢野『星占いの文化交流史』七九頁。
- (6) 矢野『星占いの文化交流史』一〇一―一〇九頁。

付表 『宿曜経』の図の比較

		ラベル	「天」の日付と宿		「地」の日付と宿	
妙蓮院	下巻	廿七宿十二宮圖	十二月十五日	星	六月十五日	女
無量寿院 1 (上下全)	上巻 5 葉	天竺十二宮圖	六月十五日	女	十二月十五日	星
	上巻 7 葉	新修十二宮圖	六月一日	鬼	十二月一日	虚
	下巻 6 葉	二十七宿十二宮圖	十二月十五日	星	六月十五日	女
無量寿院 2 (上下別巻)	上巻 7 葉	天竺十二宮圖	十二月十五日	星	六月十五日	女
	上巻 9 葉 下巻	なし	十二月一日	虚	六月一日	鬼
			なし			
七寺	上巻	天竺十二宮圖	十二月十五日	星	六月十五日	女
	上巻	新修十二宮圖	十二月一日	虚	六月一日	鬼
	下巻	二十七宿十二宮圖	正月十五日	翼	七月十五日	室
新宮寺	上巻	天竺十二宮圖	十二月十五日	星	六月十五日	女
	上巻	新修十二宮圖	十二月一日	虚	六月一日	鬼
	下巻	二十七宿十二宮圖	十月十五日	觜	四月十五日	心
持明院	上巻 6	天竺十二宮圖	なし			
	上巻 8	天竺十二宮圖				
	下巻	なし				
同志社	上巻 7b	天竺十二宮圖	十二月十五日	星	六月十五日	女
	上巻 9	新修十二宮圖	十二月一日	虚	六月一日	鬼
	下巻 8	なし	十二月十五日	星	六月十五日	女
覚勝本	上巻 5 葉裏	天竺十二宮圖	六月十五日	女	十二月十五日	星
	上巻 7 葉裏	新修十二宮圖	六月一日	鬼	十二月一日	虚
	下巻 5 葉裏	二十七宿十二宮圖	十二月十五日	星	六月十五日	女
村上本	下巻 7 葉	二十七宿十二宮圖	十二月十五日	星	六月十五日	女
大正大蔵経	下巻、p.395	二十七宿十二宮圖-1	二月十五日	角	八月十五日	婁
		二十七宿十二宮圖-2	九月十五日	昴	三月十五日	氏

A comparison of two recensions of the *Xiuyao jing*

Michio Yano

The *Xiuyao jing*, a book on Esoteric Buddhist astrology composed by Amoghavajra, was first translated into Chinese by Shiyao in 759 CE and was revised by Yang Jingfeng in 764 CE. At the end of the revised version Yang added a chapter on the method of weekday computation. Later, the revised edition with the additional chapter was arranged as the first fascicle and the first translation was put as the second fascicle. The *Xiuyao jing* in two fascicles was brought to Japan by Kukai in 806 CE. This text became the basic source book of Sukuyōdō school of Japanese astrology. The manuscript of the text was faithfully copied in Japan and there survive many old manuscripts which convey the original form of the text, while in China the text was frequently modified as a result of sinicization. There are many significant differences between the two recensions, namely, the old manuscripts in Japan on one hand, and the Tripiṭaka versions in China and Korea on the other. The present article compares the two recensions and shows the three major differences:

- (1) While the chapter on the method of weekday computation was preserved in the Japanese recension, it was omitted in the Tripiṭaka recension.
- (2) While the Japanese recension keeps the original 27 nakṣatra (lunar mansion) system, the Chinese Tripiṭaka recension has modified it into the 28 nakṣatra system.
- (3) At the beginning of the first fascicle, there is a significant hapology in the Tripiṭaka recension, while Japanese manuscripts preserve the correct reading.

Even among the old manuscripts in Japan there are some differences in the arrangement and labelling of diagrams. I have provided a list in the appendix to show the differences. In conclusion, emphasis has been placed on the importance of manuscripts preserved in Japan in the study of history of translation of Sanskrit Buddhist texts into Chinese.

正誤表

3頁上段12行目

紙媒体…「バラニー」(22)とすも誤り。

PDF版…「バラニー」(28)と訂正する。